

精神的不健康学生の早期発見と早期指導に関する研究-(3)

——NAC L (名大式性格診断形容詞チェックリスト)の検討——

丸 井 文 男 久 世 敏 雄* 村 上 英 治**

I 問題の所在

われわれは、既に昭和39年、40年に亘り、精神的不健康学生の早期発見に関する心理学的一方法として、Screening Test を用いる方法を企図し、NMH I と NAC L の2つの検査法について標準化及び妥当性の検討を重ね、更に、それらに基づく早期指導についても実施してきた。それらの結果は、既に「精神的不健康学生の早期発見に関する研究」^(注1)「精神的不健康学生の早期発見と早期指導に関する研究」^(注2)の2篇において発表した。

このうち、NAC L は、Trent, R.D.^(注3) Sarbin, T.R.^(注4) らによって代表される性格診断の形容詞法 (Adjective check list) といわれるもので、新たにわれわれが作成した自己診断によって、自己概念 (self concept) の在り方を分析・把握する一方法である。そしてこれらのうち、男子学生に関する基準の作成した結果は、前掲の報告に述べたが、今回は、女子学生に関する基準の作成を試み、その検討を行なったものである。

II 方 法

NAC L の質問紙は、174 個の性格を表現する形容詞から構成されている。これらの形容詞を選択した基準は、既に報告したものに述べたが、これらの形容詞は、

* 名古屋大学教養部

** 名古屋大学教養部助教授

注1 名古屋大学学生部「精神的不健康学生の早期発見に関する研究」第1次報告 昭和39年3月

注2 名古屋大学学生部「精神的不健康学生の早期発見と早期指導に関する研究」第2次報告 昭和40年3月

注3 Trent, R.D. & others: The cross-cultural application of the adjective check list adjustment index; A Preliminary report.

J. soc. Psychol. 1960. 51. 265~276

注4 Sarbin, T.R. & Rosenberg, B.G: Contribution to role-taking theory IV. A method for obtaining a qualitative estimate of the self.

J. soc. Psychol. 1955. 42. 71~81

人間の状態、性格の特徴として自己診断によって把握して「望ましいもの (Favorable)」「望ましくないもの (Unfavorable)」「どちらともいえないもの (Neutral)」の3群に分類されるものである。具体的方法としては、この形容詞チェックリストを大学生に提示して、自分の性格の特徴として、もっとも適しているものに○印をつけるよう指示する。○印の数は、とくに制限していない。対象者は、第2次報告 (昭和39年) では、教養部文科系・理科系1年男子971名、女子82名であった。その後、昭和40年4月に、文科系・理科系1年男子1,206名、女子92名に実施した。さらに、女子に関しては、日本福祉大1年194名、名古屋女子1年63名、2年209名にも実施した。したがって、女子の被験者は、合計640名である。

使用した質問紙はつぎのとおりである。

III 結 果

1. 選択数とF%, U%について

整理は、第2次報告と同様、174の形容詞について、どの程度の選択がなされているか、さらに、その選択数のうち、望ましい形容詞を選択した数、および比率 (F%)、望ましくない形容詞を選択した数および比率 (U%) が算出された。

これらの結果を、順次、男女別、学年別—1年女子と2年女子—、学校別—名古屋大学、日本福祉大学および名古屋女子大学—、文科系、理科系別に検討した。

1) 男子・女子の比較

表1は、上述のようにしてえられた男子・女子の結果を示している。

この結果によれば、選択した平均数は、男女ともに37.8個である。しかし、このうち、望ましくない形容詞 (U) を選択した数は、女子の方が男子よりも多い。

つぎに、われわれが問題とする、F%, U%の比率をみると、男子は、Fが43.2%, Uが44.0%とほとんど差がないのであるが、女子は、Fが40.9%, Uが47.4%となっており、多少、U%の比率の高いことがわかる。

精神的不健康学生の早期発見と早期指導に関する研究

N A C L — 1

学校
大学

学年 組 番 満 才 氏名

男
女

あなたは自分自身について、いろいろ考えたことがあるでしょう。自分はこういう人間だとかああいう人間だとか、いうように自分自身をとらえているでしょう。つぎにそうしたあなたの性質や状態をあらわす言葉がたくさんかいてあります。それらを読んであなた自身をあらわすのに適した言葉がありましたらそれぞれの言葉の右欄に○印をつけて下さい。○印の数には制限がありませんから、あなた自身をうまくあらわすと思うだけ○印をつけて下さい。

思いやりのある		ぐちの多い		融通のきかない		寛容な	
虚無的な		乱暴な		公平な		自信過剰な	
独占欲の強い		正直な		つかれやすい		不満の多い	
几帳面な		頼りない		矛盾した		建設的な	
あきっぽい		劣等感の強い		幸福な		陰うつな	
わがままな		素直な		おちつかない		悲観的な	
意志強固な		虚栄心の強い		秘密をもった		活発な	
こだわりやすい		不器用な		誠実な		きまぐれな	
不幸な		親切な		怠惰な		無遠慮な	
思慮深い		怒りっぽい		冷淡な		潔白な	
おもいつめるたちの		なやみやすい		計画的な		功利的な	
排他的な		責任感のある		神経過敏な		皮肉屋な	
自由な		怪そつな		ひがみやすい		慎重な	
いらつきの多い		ぼんやりした		実行力のある		自己中心的な	
不合理な		正義感の強い		粗野な		破壊的な	
協力的な		動揺しやすい		無計画な		積極的な	
つまらない		退屈的な		自主的な		厭世的な	
ひっこみ思案な		思索的な		意志薄弱な		不安定な	
独立的な		とまどいの多い		非現実的な		快活な	
興奮しやすい		びくびくした		がまん強い		自己嫌悪の強い	
不調和な		規律正しい		ずるい		もろい	
真実性のある		順応しにくい		みにくい		独創的な	
退屈な		みえ坊な		淡泊な		だらしない	
反抗的な		抱よう力のある		依頼心の強い		不潔な	
表現力のある		決断力のない		病的な		まじめな	
気の小さい		非常識な		良心的な		がんこな	
未熟な		努力家の		どうまんな		まぬけな	
同情心のある		虚弱な		理想のない		内省的な	
自信喪失の		浪費的な		敏しょうな		想像力のない	
子供っぽい		民主的な		独断的な		受身的な	
勇気のある		冷たい		好奇心に富んだ		こりしょうな	
陽気な		移り気な		信仰深い		外向的な	
礼儀正しい		陰けんな		おとなしい		探究心のある	
激しやすい		保守的な		ひかえめな		残酷な	
はにかみやの		綿密な		ずうずうしい		批判的な	
友情が深い		しっと深い		内向的な		立派な	
せっかちな		複雑な		若若しい		打算的な	
着実な		鈍感な		無口な		統制力のある	
とげとげしい		都会的な		用心深い		脱線しやすい	
平凡な		優秀な		人間味のない		笑い勝ちな	
理想的な		不精な		直観的な		冷静な	
ばかていねいな		ユーモラスな		みじめな		理知的な	
無気力な		適応のよい		憂うつな		魅力的な	
やさしい		ものやわらかい					

名古屋大学

F	U	N	T

表 1 平均選択数と F %, U % 注5

性 別	選 人 数	平均選択数	標準偏差 (S.D.)	F			U		
				選択数	S.D.	%	選択数	S.D.	%
男	2,177	37.7	18.1	16.3	10.5	43.2	16.6 **	12.6	44.0
女	640	38.4	18.0	15.7	10.1	40.9	18.2	12.9	47.4

注5 表中**印は1%水準、*印は5%水準で、有意差の認められたものである。表に関して以下同様である。

2) 学年別の比較—女子—

表2は、女子に関して、1年女子(名大、日本福祉大、名女大)と2年女子(名女大)の選択数、F%, U%を示している。

この表によれば、平均選択数は、1年の方が2年より多少多い。これは、Fの選択数は1・2年の間で、ほと

んど差がないのであるが、Uを選択した数が、1年が2年より多い結果によるものである。

つぎに、F%, U%の比率をみると、1年はFが39.2%, Uが49.4%となっており、Uを選択した比率の高いことがわかる。これに反して、2年は、F%, U%の差はほとんどみられない。

表 2 平均選択数と F %, U %

学 年	選 人 数	平均選択数	S.D.	F			u		
				選択数	S.D.	%	選択数	S.D.	%
1	431	39.3	17.9	15.4	10.5	39.2	19.4 **	13.2	49.4
2	209	36.6	17.8	16.3	9.1	44.5	15.9	12.0	43.4

3) 学校別の比較—女子—

表3は、学校別にみた平均選択数とF%, U%を示しており、表4はその検定の結果である。

表3、表4によれば、名大、日本福祉大の学生は、平

均選択数、F、Uの選択数ともによく似た結果を示しているが、名女大の学生とは、かなり異った結果を示している。

つぎに、F%, U%の比率をみると、これも、名大、

表 3 平均選択数と F %, U % 注6

学 校 別	選 人 数	平均選択数	S.D.	F			U		
				選択数	S.D.	%	選択数	S.D.	%
名 大	174	37.0	17.9	13.6	8.9	36.7	19.0	13.7	51.4
日本福祉大	194	39.7	18.0	15.3	10.9	38.5	20.1	13.5	50.6
名 女 大	63	44.5	16.5	20.8	10.7	46.7	18.1	9.8	40.7

注6 名女大2年の結果は省いてある。

表 4 注7

	名 大	日 福 大	名 女 大
名 大			**
日 福 大			**
名 女 大	**		

注7 上段はFの選択数，下段は平均選択数の検定結果である。

日本福祉大の学生と名女大生では，かなり顕著な差異がみられている。名女大生は，他校の学生にくらべ，F%が多く，U%が少ない傾向がみられる。

4) 文科系，理科系の比較—女子—

表5は，名大文科系，理科系女子の平均選択数，F%，U%を示している。

この結果によれば，文科系，理科系の間に有意な差異はみられない。とくに，Uの選択数，U%⁽¹¹⁸⁾に関しては，ほとんど差がみられない。

表 5 平均選択数とF%，U%

科 別	人 数	選 択 数 平均選択数 S.D.	F			U		
			選択数	S.D.	%	選択数	S.D.	%
文 科	127	36.3 18.0	12.9	9.1	35.5	18.8	14.3	51.8
理 科	47	38.9 17.5	15.7	9.3	40.4	19.5	12.2	50.2

以上，とくに女子の結果を中心にみてきたのであるが，これらの結果によれば，大学1年と2年の間で，F%，U%の比率に差がみられること，さらに，同じ1年生にしても，在学する大学の違いによって，F%，U%の比率に差異のみられることが指摘された。

このことは，女子に関しては，少なくとも，学校差，学年差を考慮する必要があることを示すものであり，形容詞チェックリストによって，自己概念に関する基準の作成を行なう場合には，細心の注意をはらうことが必要である。

そこで，われわれは，こうした結果がえられたため

に，以下，女子に関しては，平均選択数とU%による基準の作成を断念し，これらの結果の詳細な検討を，さらに進めることにする。

2. 項目別選択率について

つぎに，174の項目別に，それらが選択された比率の検討を，男女，学年，学校および文科・理科系間について，順次おこなっていく。⁽¹¹⁹⁾

1) 男子，女子の比較

まず，男子，女子がそれぞれ50%以上選択した項目は，表6のとおりであり，5%以下の選択をした項目は，表7のとおりである。

注8 参考までに男子の比較をすつぎのとおりである。

平均選択数とF%，U%

科 別	人 数	選 択 数 平均選択数 S.D.	F			U		
			選択数	S.D.	%	選択数	S.D.	%
文 科	553	40.1 ** 18.9	17.3 *	10.8	43.1	18.0 **	13.6	44.9
理 科	1,624	36.8 17.7	16.0	10.3	43.5	16.1	12.2	43.8

この結果によれば，選択数に関しては文科系，理科系の間に差異がみられるが，F%，U%に関しては，ほとんど差がみられない。

注9 男子に関しては，昭和39年度の資料であり，女子に関しては，名女大2年生を除いた全資料である。

表 6 50%以上選択された項目

男 子 (971名)	女 子 (431名)
気の小さい U(67.1)	こだわりやすい U(57.8)
思いやりのある F(66.2)	同情心のある F(57.8)
同情心のある F(60.8)	思いやりのある F(55.0)
こだわりやすい U(59.5)	子供っぽい N(53.4)
責任感がある F(58.3)	正直な F(52.0)
正直な F(55.6)	なやみやすい U(51.3)
ひっこみ思案な U(55.5)	
内向的な N(53.2)	
まじめな F(52.9)	

表 7 5%以下の選択項目

男 子	女 子
みにくい U(4.8)	虚弱な U(4.9)
病的な U(4.6)	乱暴な U(3.7)
人間味のない U(4.1)	病的な U(3.5)
乱暴な U(3.9)	破壊的な U(3.2)
不幸な U(3.6)	残酷な U(2.8)
不潔な U(3.6)	不幸な U(2.6)
立派な F(3.6)	魅力的な F(1.6)
残酷な U(3.3)	優秀な F(1.2)
みじめな U(2.8)	不潔な U(0.9)
	立派な F(0.7)

なお、表中、F、U、Nの記号は、^(注10)それぞれの形容詞が、人間の性質、状態として、「望ましい」「望ましくない」「どちらともいえない」形容詞を表わしている。

また、男女の間に、有意差のみられる項目は、表8の

とおりである。このうち、男子の側にかかっている項目は、男子が女子にくらべて、有意に多く選択した項目であり、同様に、女子が男子にくらべて、有意に多く選択した項目は、女子の側に表示されている。

表 8

男 女 間 に 有 意 差 の あ る 項 目 注11

男	子	女	子
思いやりのある F	おちつかない U	わがままな U	つかれやすい U
几帳面な F	怠惰な U	協力的な F	矛盾した U
思慮深い F	計画的な F	つまらない U	幸福な F
排他的な U	神経過敏な U	興奮しやすい U	冷淡な U
ひっこみ思案な U	良心的な F	反抗的な U	ひがみやすい U
真実性のある F	敏しょうな F	表現力のある F	依頼心の強い U
気の小さい U	独断的な U	自信喪失の U	若々しい F
はにかみやの N	おとなしい N	子供っぽい N	活発な F
友情が深い F	ひかえめな F	陽気な F	潔白な F
着実な F	内向的な N	せっかちな U	積極的な F
親切な F	無口な N	劣等感の強い U	快活な F
責任感のある F	建設的な F	不器用な U	自己嫌悪の強い U
思索的な F	功利的な U	なやみやすい U	もろい U
びくびくした U	慎重な F	ぼんやりした U	がんこな U
抱よう力のある F	厭世的な U	動揺しやすい U	外向的な N
努力家の F	まじめな F	とまどいの多い U	笑い勝ちな N
虚弱な U	内省的な F	決断力のない U	
民主的な F	こりしょうな N	冷たい U	
保守的な N	探究心のある F	しっと深い U	
綿密な F	理知的な F	複雑な N	
優秀な F	魅力的な F	鈍感な U	
不精な U		融通のきかない U	

注11表中の順序は、とくにパーセントの多い、少いを表わしてはいない。5%水準以上の有意差のあった項目を羅列したものである。以下、表12、表17、表18、表24に関しても同様である。

注10 以下、表7、表8、表10、表11、表12、表14、表15、表16、表17、表18、表22、表23、表24に関しても同様である。

表 9 性別と F, U, N

性別	男	女
形容詞の分類		
F	25	9
U	12	25
N	6	4
計	43	38

P<0.01

表 9 は、表 8 の形容詞の分類による、F, U, N を男女別にまとめた表であるが、この表によれば、男子は、女子にくらべ、F, すなわち、「望ましい」形容詞が有意に多く、反対に、女子は、男子にくらべ、U, すなわち、「望ましくない」形容詞が、有意に多い結果を示している。

2) 学年別の比較—女子—

つぎに、1 年女子、2 年女子の比較をしてみよう。まず 50% 以上選択した項目についてであるが、1 年女子は、すでに、表 6 において示したので、ここでは、表 10 に、2 年女子の結果のみ提示する。

表 10 50%以上選択された項目

2 年 女 子 (209 名)			
同情心のある	F (67.5)	なやみやすい	U (55.5)
平 凡 な	N (64.1)	幸 福 な	F (52.6)
こだわりやすい	u (60.8)	親 切 な	F (51.7)
正 直 な	F (60.3)	おもいつめるたちの	U (50.2)
思いやりのある	F (56.9)		

表 11 は、2 年女子が 5 % 以下の選択をした項目を示している。

表 11 5 % 以下の選択項目

2 年 女 子			
みにくい	U (4.8)	破壊的な	U (3.3)
陰うつな	U (4.8)	非常識な	U (2.9)
人間味のない	U (4.3)	虚弱な	U (2.9)
厭世的な	U (4.3)	病的な	U (1.9)
ずるい	U (4.3)	残こくな	U (1.0)
乱暴な	U (3.8)	不幸な	U (0.5)
みじめな	U (3.8)	優秀な	F (0.5)
無遠慮な	U (3.8)	不潔な	U (0.5)
退屈的な	U (3.3)	立派な	F (0.5)

表 12 学年間に有意差のある項目

1 年 女 子				2 年 女 子	
虚無的な	U	複雑な	N	同情心のある	F
独立的な	F	鈍感な	U	礼儀正しい	F
自信喪失の	U	不精な	U	平凡な	N
子供っぽい	N	融通のきかない	U	理想的な	F
せっかちな	U	矛盾した	U	やさしい	F
虚栄心の強い	U	無計画な	U	正直な	F
不器用な	U	自主的な	F	親切な	F
軽そつな	U	好奇心にとんだ	N	規律正しい	F
ぼんやりした	U	自己中心的な	U	幸福な	F
とまどいの多い	U	内省的な	F	良心的な	F
順応しにくい	U	受身的な	N	若々しい	F
みえ坊な	U	探究心のある	F	潔白な	F
決断力のない	U	批判的な	N	魅力的な	F

また、1 年女子と 2 年女子の間に有意差のみられる項目は、表 12 のとおりである。このうち、1 年女子の側にかかっている項目は、1 年女子が 2 年女子にくらべ、有意に多く選択した項目であり、同様に、2 年女子が、1 年女子にくらべ、有意に多く選択した項目は、2 年女子の側に表示されている。

表 13 は、表 12 の形容詞の分類による、F, U, N を学年別にまとめた表であるが、この表によれば、1 年女子は、2 年女子にくらべ、U, すなわち、「望ましくない」形容詞が有意に多く、反対に、2 年女子は、1 年女子にくらべ、F, すなわち、「望ましい」形容詞が有意に多い結果を示している。

表 13 学年別と F, U, N

学年別 形容詞の分類	1 年 女 子	2 年 女 子
F	4	12
U	17	0
N	5	1
計	26	13

P<0.01

3) 学校別の比較—女子—

つぎに、名大、日本福祉大、名女大の3大学の学生について比較をしよう。まず、各大学の女子学生がそれぞれ、50%以上選択した項目は表14のとおりであり、5%以下の選択をした項目は、表15のとおりである。

さらに、名大女子と日本福祉大学女子の間に有意差のみられる項目は、表16のとおりであり、名大女子と名古屋女子大学の間に有意差のみられる項目は、表17のとおりであり、さらに日本福祉大学女子と名古屋女子大学の間に有意差のみられる項目は、表18のとおりである。

表 14 50 % 以上 選 択 さ れ た 項 目

名 大 女 子 (174名)	日本福祉大学女子(194名)	名 古 屋 女 子 大 学 (63名)	
こだわりやすい U(54.0)	同情心のある F(61.3)	同情心のある F(71.4)	責任感のある F(54.0)
気の小さい U(50.0)	思いやりのある F(59.8)	こだわりやすい U(65.1)	がまん強い F(54.0)
	子供っぽい N(59.3)	思いやりのある F(63.5)	礼儀正しい F(52.4)
	こだわりやすい U(58.8)	正直な F(60.3)	動揺しやすい U(52.4)
	なやみやすい U(55.7)	親切な F(60.3)	まじめな F(52.4)
	おもいつめるたちの U(53.1)	友情が深い F(58.7)	気の小さい U(50.8)
	正直な F(53.1)	ひっこみ思案な U(57.1)	平凡な N(50.8)
	平凡な N(52.1)	なやみやすい U(55.5)	
	わがままな U(51.6)	素直な F(54.0)	

表 15 5 % 以 下 の 選 択 項 目

名 大 女 子	日本福祉大学女子	名 古 屋 女 子 大 学	
人間味のない U(4.6)	虚弱な U(4.6)	排他的な U(4.8)	優秀な F(1.6)
理想的な F(4.0)	破壊的な U(4.1)	不調和な U(4.8)	理想のない U(1.6)
虚弱な U(4.0)	病的な U(3.6)	退はいたな U(4.8)	人間味のない U(1.6)
ずるい U(4.0)	不幸な U(3.1)	ずるい U(4.8)	魅力的な F(1.6)
みじめな U(3.4)	残こくな U(2.6)	建設的な F(4.8)	破壊的な U(0)
破壊的な U(3.4)	魅力的な F(2.6)	想像力のない U(4.8)	不潔な U(0)
敏しょうな F(2.9)	不潔な U(1.0)	立派な F(4.8)	
残こくな U(2.9)	優秀な F(0)	みじめな U(3.2)	
不幸な U(2.3)	立派な F(0)	無遠慮な U(3.2)	
乱暴な U(2.3)		功利的な U(3.2)	
優秀な F(2.3)		まぬけな U(3.2)	
病的な U(2.3)		残こくな U(3.2)	
不潔な U(1.1)		不幸な U(1.6)	
魅力的な F(0.6)		乱暴な U(1.6)	
立派な F(0)		非常識な U(1.6)	

表 16

学校間に有意差のある項目

名 大 女 子		日 本 福 祉 大 学 女 子			
几帳面な	F	思いやりのある	F	親切な	F
激しやすい	U	おもいつめるたちの	U	なやみやすい	U
努力家の	F	自由な	F	浪費的な	U
内向的な	N	協力的な	F	民主的な	F
慎重な	F	同情心のある	F	ユーモラスな	F
自己中心的な	U	子供っぽい	N	幸福な	F
内省的な	F	礼儀正しい	F	若々しい	F
冷静な	F	友情が深い	F	もろい	U
		せっかちな	U	独創的な	F
		平凡な	N	まぬけな	U
		やさしい	F	脱線しやすい	U

表 17

学校間に有意差のある項目

名 大 女 子		名 古 屋 女 子 大 学					
虚栄心の強い	U	思いやりのある	F	素直な	F	敏しょうな	F
決断力のない	U	几帳面な	F	親切な	F	信仰深い	N
融通のきかない	U	思慮深い	F	民主的な	F	ひかえめな	F
無計画な	U	おもいつめるたちの	U	ユーモラスな	F	用心深い	F
功利的な	U	自由な	F	ものやわらかい	F	積極的な	F
		同情心のある	F	公平な	F	快活な	F
		礼儀正しい	F	幸福な	F	探究心のある	F
		友情が深い	F	誠実な	F	批判的な	N
		理想的な	F	神経過敏な	U	統制力のある	F
		やさしい	F	がまん強い	F		

表 18

学校間に有意差のある項目

日本福祉大学女子		名 古 屋 女 子 大 学					
つまらない	U	几帳面な	F	努力家の	F	用心深い	F
未熟な	U	思慮深い	F	綿密な	F	慎重な	F
軽そつな	U	礼儀正しい	F	ものやわらかい	F	まじめな	F
ぼんやりした	U	はにかみやの	N	公平な	F	探究心のある	F
決断力のない	U	友情が深い	F	誠実な	F	批判的な	N
融通のきかない	U	着実な	F	計画的な	F	統制力のある	F
無計画な	U	理想的な	F	神経過敏な	U	理知的な	F
まぬけな	U	素直な	F	がまん強い	F		
		親切な	F	敏しょうな	F		
		責任感のある	F	ひかえめな	F		

表19は、表16の形容詞の分類によるF、U、Nを、名大女子、日本福祉大学女子別にまとめた表であり、表20は、同様に、表17の形容詞の分類によるF、U、Nを、

名大女子、名古屋女子大学別にまとめた表であり、表21は、表18の形容詞の分類によるF、U、Nを、日本福祉大学女子、名古屋女子大学別にまとめた表である。

表 19 学校別と F, U, N

学校別 形容詞の分類	名 大 女 子	日本福祉大学女子
F	5	13
U	2	7
N	1	2
計	8	22

表 20 学校別と F, U, N

学校別 形容詞の分類	名 大 女 子	名古屋女子大学
F	0	25
U	5	2
N	0	2
計	5	29

$P < 0.01$

表 21 学校別と F, U, N

学校別 形容詞の分類	日本福祉大学女子	名古屋女子大学
F	0	4
U	8	1
N	0	2
計	8	27

$P < 0.01$

表19によれば、名大女子と日本福祉大学女子の間に、F, U, Nに関して、とくに差異は認められない。ところが、表20、表21によれば、名大女子と日本福祉大学女子は、名古屋女子大学にくらべ、U, すなわち、「望ましくない」形容詞が有意に多く、一方、名古屋女子大学は、他の二校にくらべ、F, すなわち、「望ましい」形容詞が圧倒的に多い。

4) 文科系、理科系の比較

つぎに、名大生の文科系、理科系を比較しよう。文科系、理科系の男女それぞれの学生が、50%以上選択した項目は、表22のとおりであり、5%以下の選択をした項目は、表23のとおりである。

表 22 50 % 以上 選 択 さ れ た 項 目

男 子		女 子	
文 科 (195名)	理 科 (776名)	文 科 (127名)	理 科 (47名)
思いやりのある F(68.2)	気の小さい U(68.0)	こだわりやすい U(55.1)	子供っぽい N(55.3)
気の小さい U(63.1)	思いやりのある F(65.6)	同情心のある F(52.8)	こだわりやすい U(51.1)
同情心のある F(62.6)	同情心のある F(60.2)	気の小さい U(51.2)	未 熟 な U(51.1)
こだわりやすい U(57.4)	こだわりやすい U(60.0)	責任感のある F(51.2)	
正 直 な F(56.4)	ひっこみ思案な U(56.4)		
親 切 な F(55.4)	正 直 な F(55.3)		
責任感のある F(55.4)	内向的な N(53.5)		
まじめな F(53.8)	まじめな F(52.6)		
なやみやすい U(52.8)			
良心的な F(52.3)			
ひっこみ思案な U(51.8)			
内向的な N(51.3)			
あきっぽい U(50.8)			

精神的不健康学生の早期発見と早期指導に関する研究

表 23

5 % 以下の選択項目

男 子				女 子			
文 科		理 科		文 科		理 科	
非常識な	U(4.6)	病的な	U(4.9)	信仰深い	N(4.7)	不合理な	U(4.3)
病的な	U(3.6)	みにくい	U(4.8)	ずうずうしい	U(4.7)	理想的な	F(4.3)
人間味のない	U(3.6)	信仰深い	N(4.6)	人間味のない	U(4.7)	乱暴な	U(4.3)
残こくな	U(3.1)	人間味のない	U(4.2)	陰うつな	U(4.7)	退はいのな	U(4.3)
みじめな	U(2.1)	不潔な	U(4.0)	厭世的な	U(4.7)	優秀な	F(4.3)
不潔な	U(2.1)	乱暴な	U(3.5)	独創的な	F(4.7)	粗野な	U(4.3)
		残こくな	U(3.3)	理想的な	F(3.9)	ずるい	U(4.3)
		立派な	F(3.1)	ずるい	U(3.9)	みにくい	U(4.3)
		不幸な	U(3.0)	不幸な	U(2.4)	理想のない	U(4.3)
		みじめな	U(3.0)	虚弱な	U(2.4)	人間味のない	U(4.3)
				敏しょうな	F(2.4)	憂うつな	U(4.3)
				みじめな	U(2.4)	まぬけな	U(4.3)
				破壊的な	U(2.4)	残こくな	U(4.3)
				残こくな	U(2.4)	不幸な	U(2.1)
				乱暴な	U(1.6)	ばかていねいな	U(2.1)
				優秀な	F(1.6)	不潔な	U(0)
				不潔な	U(1.6)	立派な	F(0)
				魅力的な	F(0.8)	魅力的な	F(0)
				病的な	U(0)		
				立派な	F(0)		

表 24

文科系、理科系間に有意差のある項目

男 子				女 子			
文 科		理 科		文 科		理 科	
虚無的な	U	適応のよい	F	保守的な	N	自由な	F
あきっぽい	U	ものやわらかい	F			独立的な	F
はいつめるたりの	U	矛盾した	U			未熟な	U
協力的な	F	誠実な	F			普実な	F
反抗的な	U	自主的な	F			思索的な	F
表現力のある	F	良心的な	F			自主的な	F
自信喪失の	U	敏しょうな	F			淡泊な	F
礼儀正しい	F	独断的な	U			病的な	U
激しやすい	U	直視的な	N			若々しい	F
劣等感の強い	U	寛容な	F			皮肉屋な	U
なやみやすい	U	不満の多い	U			探究心のある	F
責任感のある	F	自己中心的な	U				
動揺しやすい	U	不安定な	U				
退はいのな	U	快活な	F				
抱よう力のある	F	自己嫌悪の強い	U				
浪費的な	U	内省的な	F				
民主的な	F	批判的な	N				
複雑な	N	魅力的な	F				
ユーモラスな	F						

さらに、男女別に、文科系、理科系の間に有意差のみられる項目は、表24のとおりである。このうち、男女、それぞれ、文科系の側にかかっている項目は、文科系が理科系にくらべて、有意に多く選択した項目であり、同様に、理科系が文科系にくらべて、有意に多く選択した項目は、理科系の側に表示されている。

表25は、表24の形容詞の分類によるF、U、Nを、男女別に、文科、理科系に関してまとめた表である。

表 25 文科系、理科系別とF、U、N

形容詞 の分類	性別 科 別	男 子		女 子	
		文 科	理 科	文 科	理 科
F		17	0	0	8
U		17	1	0	3
N		3	1	1	0
計		37	2	1	11

この表によれば、男子の場合は文科系が圧倒的に多く、女子の場合は、理科系が圧倒的に多い。しかし、F、U、Nに関しては、とくに、とりたててのべるほどの特徴はみられない。

IV 結果の要約ならびにその考察

以上において、われわれは、NACL（名大式性格診断形容詞チェックリスト）の検討をおこなった。それは、とくに、女子640名を中心に、男女別、学年別、学校別、文科・理科系別に検討したのであるが、その要約をのべると、つぎのとおりである。

1) まず、選択数とF%、U%についてみると、学年別、学校別に顕著な差異がみられた。

i) 大学1年女子は、F%に比して、U%が多いのに反して、大学2年女子は、F%、U%の間に、ほとんど差がみられない。

ii) さらに、同じ大学1年でも、名大、日本福祉大学1年生は、F%に比して、U%の多い傾向がみられるが、名古屋女子大学1年生は、U%に比して、むしろ、F%の多いことがわかる。

2) つぎに、項目別選択率についてみると、男女別、学年別、学校別に顕著な差がみられた。174の形容詞のうち、とくに有意差のみられた項目を中心にみると、

i) 男女別については、男子は女子にくらべ、F、す

なわち、「望ましい」形容詞を選択するものが多く、反対に、女子は、U、すなわち、「望ましくない」形容詞を選択するものが多い。

このことは、先に報告した第2次報告において指摘したように、NMHIとNACLの反応資料にもとづいて抽出した要精密診断者の面接診断の結果、女子学生は、男子学生に比して、心理検査の成績と面接診断の成績とずれが大きかったことと一致するように思う。即ち、女子学生は、一般に自己概念や、自己の内的体験を男子に比してより多く否定的に把握する傾向があるといえることができる。

ii) 学年別については、1年女子は2年女子にくらべ、Uを選択するものが多く、反対に、2年女子は、1年女子にくらべ、Fを選択するものが多い。

iii) 学校別については、名大女子と日本福祉大学女子は、名古屋女子大学生にくらべ、Uを選択するものが多い、名古屋女子大学生は、他の二校にくらべ、Fを選択するものが多い。

3) 上述の結果から、女子学生に関する基準の作成については、今後なお検討を要すると考える。

以上が結果の要約であるが、学年別の差異、学校別の特徴については、青年期における自己概念(Self-concept)の発達、及び、自己概念の内的規定因の社会的要因、即ち生活感情、或は、自己を社会内存在としていかに位置づけるかの認知過程、自己省察の深まりの程度との関係が考えられなければならないように思われるが、われわれの得られた資料は、自己概念に関する従来の知見に比してある程度理解しうるものである。

V 今後の展開

われわれは、Trent, R.D., Sarbin, T.R. らによって代表される形容詞チェックリストを用いて、自己概念に関する検討をおこなってきた。そして、上述した結果をうることができたのであるが、ここで、われわれは、今後このこされた2,3の問題を指摘したい。

1) われわれは、形容詞チェックリストを作成するにさいして、i) 約1,000名の大学生（新入生）に自己の性格、行動特徴を記述してもらい、そこで使用される形容詞を集めた。ii) 直接、大学1年生に自己をあらわすにふさわしい形容詞を記述させた。こうした手続によって、形容詞の蒐集をおこなったのであるが、可能ならば、日本語の語いに関する基本的調査をおこない、その語いに関する使用頻度、理解度など、十分検討した上で、そうした語いを利用することが望ましい。

さらに、蒐集した形容詞を、専門家に依頼して、F、

U, Nの三つに分類したのであるが、このF, U, Nにわけ基準は、「人間の性質・状態として望ましい」と考えられるか否かということであった。しかし、各形容詞は、人間を多面的に把える場合にみられる特徴であって、その形容詞のもつ意味において、精神健康の概念や原理にもとづいて、一貫した理念のもとに選択されたものではない。従って、できあがった調査票を **Screening Test** として、さらに有効に使用するためには、形容詞を、「精神健康の面を把えるのに、望ましい形容詞か否か」という観点から分類し、今後、さらに検討することが必要かと思われる。

2) また、更に他の一面から考慮すれば、語いの蒐集が完全になされたら、それらの語いを使用することによって、青年期の自己概念に関する検討をおこなう必要がある。われわれは、この研究においては、望ましくないと判断した形容詞を数多く選択するのは、精神健康の面において、不健康な徴候を示す学生ではないかと仮定したのであるが、もともと、青年期自体が、自己否定的な傾向を顕著に示す時期である。そこで、われわれは、

こうした形容詞チェックリストによる青年の一般的な傾向、基準を、さらに多数の被験者によって自己概念の発達の、地域的差異等を考慮にいった上で、あらためて、これらの問題は、再検討される必要もあろう。

3) さらに、自己概念の肯定あるいは否定が、われわれが人間の性質・状態として「望ましいか否か」という観点からとらえた、F, U, Nとただちに関連づけることができるか否かの問題がある。この問題は、この研究の基本的なものであり、これらの妥当性の検討に関しては、今後の検討が、さらに、必要と思われる。また、このことと関連して、われわれは、臨床家の知見によって、F, U, Nの三つの次元に分類したのであるが、青年期の自己概念を把握するため、F, U, Nの意味構造と性格自己診断における個々の形容詞の認知水準の面から、形容詞を、さらに、群化 (cluster) させる統計的方法の検討が必要である。